「淡き光立つ俄雨　いとし面影の沈丁花　溢るる涙の蕾から　ひとつひとつ香り始める」
　これは、「春よ来い」という松任谷由実さんの楽曲の最初の歌詞です。情景を写実的に捉えつつ、春の別れと出会いを実に象徴的に表現なさっていると思います。
　この歌のさびの部分では「春よ　遠き春よ　瞼閉じればそこに　愛をくれし君の　なつかしき声がする」と歌い上げます。春にお別れをして、時間が経っても「愛をくれし君」すなわち、「愛情を注いでくれただれか」の声が、目を閉じると耳元に蘇ってくる。その声を心の支えにして、前を向いて進もうという強い決意と感謝を感じます。
　さて、本日、愛媛県立松山東高等学校通信制課程８７名並びに NHK 学園高等学校７名の皆さんが、友人や先生方などの「愛をくれし君」の下から巣立つこととなりました。御卒業、誠におめでとうございます。同時に、保護者の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。
　皆さんの学生生活だけでなく、日常生活をも苦しめている新型コロナウイルス感染症は、本日もなお、減少傾向が見えず、高止まりの状況が続いております。
　コロナがなければ、もっといろいろなことができただろうに、と考えるのは切ないのですが、私は「旅」ができないことが一番残念でなりません。日常生活から放たれて、心身をリフレッシュする旅行が大好きです。観光や見学を目的としたツアーも知的好奇心を満足させ、仕事による移動ですら、楽しさを見出せるものです。
　「旅」はよく人生に喩えられます。
　たとえば、Apple 社の創業者であるスティーブ・ジョブズ氏は、「旅の過程にこそ価値がある。」と言っています。「終着点は重要じゃない。旅の途中でどれだけ楽しいことをやり遂げているか」が大事だとし「プロセスを楽しむ姿勢が良き人生」だと述べています。このような「楽しむ」感覚が、経営者として立派な成果を上げている秘訣なのかもしれません。
　日本の哲学者、三木清氏は、明治 30 年、1897 年生まれの方ですが、奇しくも次の言葉を残されています。
　「旅は絶えず過程である。ただ目的地に着くことをのみ問題にして、途中を味わうことができない者は、旅の真の面白さを知らぬ」として、日常の生活においても到達点だけを問題にしないで「途中を味わう」ことで、人生が豊かになると述べています。
　洋の東西を問わず、また時代が大きく隔たっていても「旅」「人生」に共通する認識が生じていることは興味深いことです。
　それでは、通信制の学校で学ばれた皆さんの今日までの「旅」はどうでしたでしょうか。
　みなさんは、通信制という大きな船に、見知らぬ客と乗り合わせました。乗船した港もそれぞれで、乗船期間も様々です。皆さんの旅は、もともとは一人旅だったのかもしれません。でも、船の中では「袖すり合うも他生の縁」とか言いながら、少しずつ人間関係ができていくものです。船員さんや乗組員さんとも顔見知りになり、次第に連帯感ができあがってきます。目的地はそれぞれ違うとしても、独りではないことを感じながら旅をして学んだ経験は、とても貴重であると思います。旅の途中には、海が荒れることもあれば、トラブルが生じることもあったでしょう。そんな時、同じ船の仲間がいることは心強かったと思います。まさに「愛をくれし君」の存在を実感できる日々であったと思います。
　そして本日、航海を終えてこの船を降り、それぞれの道を歩んでいかれます。そんな皆さんに、二つの心得をお話ししたいと思います。
　まず、「ゼロから一への距離は、一から千への距離より大きい」という言葉。これは、初めの一歩を丁寧に踏み出すことが大事である、ということです。新しい仲間づくりや相手を尊重したコミュニケーションといったファーストステップに心を込めれば、これからの旅に苦難があっても、乗り越えられると思います。
　二つ目には、「旅は道連れ　世は情け」。これは、「旅も人生も、同行者がお互いに思いやりを持って仲良くやっていくことが大切」といった意味の古いことわざです。人間は自分が孤独であると思い込んでしまうと、辛さや苦労を何倍にも感じてしまうものです。最初は一人旅かもしれませんが、多かれ少なかれ「旅の道連れ」は存在します。そう自分を励ましてください。それでも元気が出ないときは「愛をくれし君」の、この通信制課程の先生方、友人たちの「なつかしき声」を耳の底に思い起こしながら、人生という旅の「過程」を楽しみ、仲間と共に歩んでいくのだということを、決して忘れないでください。いい旅になりますように。皆さんの今後のご活躍と豊かな人生をお祈りして、私の式辞といたします。